

リウマチ病診療 ビジュアルテキスト 第2版



著：上野 征夫

B5 頁416 2008年
定価 9,975 円(本体 9,500 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00445-9] 医学書院刊

『リウマチ病診療ビジュアルテキスト』が6年ぶりに改訂された。著者である上野征夫氏は、日本人として初めて米国で本場のリウマチ臨床トレーニングを受け、米国リウマチ専門医まで取得した医師である。私は著者から個人的にもご指導いただいているが、著者ほど臨床の「リウマチ」を知り尽くしたリウマチ医はいないと思っている。

米国ではリウマチ医は全身を診ることのできる真の内科医であるといわれる。本書はこの言葉通り広範囲にわたるリウマチ疾患が、著書が米国ならびに日本で長年にわたって経験した莫大な数の症例の写真や図とともに、一冊に凝縮されたものである。一人の手によってここまでのテキストが書かれたことは驚異である。いや、一人の手によって書かれたからこそ、著者の一貫したリウマチ病へのアプローチが読者に印象強く訴えるのであろう。そういった意味で、リウマチのテキストで、私はこれほど網羅され整理された“頭に残る”テキストを、英語でも日本語でも、この『リウマチ病診療ビジュアルテキスト』をおいてほかに知らない。

著者の臨床医・リウマチ医としての姿勢、そして本書の姿勢は、「リウマチ病の診断は、“病歴と身体診療(history & physical)”に90%以上頼っている。血液検査やX線撮影は、あくまで自分の診断を確認するためだけのものではない。血液検査結果よりも、しばしば診察によって得られた所見が優先する。臨床検査結果をみるときに、

このような視点を失わないようにする」(11頁)という一文に表れている。この言葉は、臨床医すべてに当てはまる態度であるが、残念ながら実践している医師は稀有であろう。しかし、この『リウマチ病診療ビジュアルテキスト』を読んだ後には、この大切な臨床医の姿勢を実践しようと思わせてくれるような本である。

今回の改訂では、ページ数も初版の240ページから、402ページへと大幅に増え、図もカラフルになり、写真も大幅に増えた。血清反応陰性脊椎関節症、血管炎、感染性関節炎などが初版より充実した。また、「リウマチ病の治療薬」では、この10年生物学的製剤の開発、臨床応用が日進月歩であるリウマチの分野において、今回の改訂版ではTNF阻害薬を中心に生物学的製剤の項が追加されている。

本書は、学生や研修医、一般臨床医(内科医、皮膚科医、整形外科医、眼科医といった各科専門医)のみならず、リウマチの専門医も含めたいろいろなレベルの医師に薦められる本である。

学生や研修医は、リウマチ疾患アトラスとして、豊富な写真や図を見ていくだけでも勉強になるし、“頭に残る”だろう。また、各論では各疾患の詳述の前に「疾患のポイント」があるが、これは疾患の概要・キーポイントを知るのに非常に役立つ。一般臨床医は参考書として使用できるし、リウマチ専門医は本書を読破することによって改めて知識の整理ができるであろう。私事であるが、私は2000年に米国リウマチ専門医試験を受け、2007年にも更新試験を受けた。その際、本書の初版を読むことが知識の整理に非常に役立った。アメリカの代表的テキスト“Primer on the Rheumatic Disease”も使用したが、明らかにこの「ビジュアルテキスト」に軍配を上げたい。

本書は、難解なリウマチ疾患にどう手をつけてよいかわからない多くの医師への福音である。今後、英語版も出されて世界中の医師にとってのリウマチテキストとなることが期待される。